【オッペンハイマーと核開発】

オッペンハイマーが率いた核開発計画「マンハッタン計画」は、科学史的にはもちろんの事、人類の歴史と言う観点からも、大きな転換点になった事件である。45年7月16日の核実験の「成功」から、広島・長崎の悲劇を経て、世界は冷戦になだれ込む。そしてキューバ危機など、本当に「破滅寸前」の所まで行った。そして20世紀の終わりにベルリンの壁が壊れ、刹那、その軛（くびき）から放たれたかのように感じた。しかし、この10年くらいの間に、また時計の針が逆戻りしてしまったことは否定しがたい事実である。

　映画「オッペンハイマー」がアカデミー賞7部門に輝いたのも、今が「そういう時代」だからである。

60年9月、オッペンハイマーは来日し「科学時代における文明の将来」と言う題の講演で、次のように語っている。―どんな方法を使っても、世界を20年前に戻すことはできない。人類はすでにそのような兵器の製造を「知って」しまったからである。この「知識」の追放することはできない。―

　知識とは広義には情報の一形態である。モノは物理法則に支配されるが、情報はそうではない。モノと違ってコピーで無限に増やせる。情報化社会の抱える問題の多くは、本質的には情報そのものの、この奇妙な性質によるものと言える。言葉・情報に対しては物理的な力は無効で、言語的・情報的に対応するよりないという事である。呪詛（じゅそ）は、言葉で解くしかないのである。ちなみにコンピュータも大戦期のアメリカで開発された。核技術も情報技術もルーツは同じアメリカである。

　彼は東京での講演を、以下のような内容で締めくくっている。いわく、現代は専門化の傾向が強くなったため、私たちを結びつける共通の伝統がむしばまれている。だから、真理と平明さを調和させ、自分の良く知らぬ物事にも、寛容と友情をもって接し、友人や他人の言葉に全力をあげて耳を傾けることが必要なのだ、と。

　教養人であった彼は、問題の本質が、科学技術を支える「専門主義」にあることを見抜いていたのだろう。そしてそれを乗り越えることが出来るのは言葉による対話なのだという事も。